

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

## Spatial Motion Expressions in Japanese : A Crosslinguistic Experimental Perspective

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-10-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松本, 曜, MATSUMOTO, Yo メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/00000752">https://doi.org/10.15084/00000752</a>

# 日本語の空間移動表現：通言語的実験から捉える

Spatial Motion Expressions in Japanese: A Crosslinguistic Experimental Perspective

松本 曜 (Yo MATSUMOTO)

## 1. プロジェクトの背景

人物や物体が移動するという現象は、日常生活の中で多く見られ、人の関心を引く現象である。そのためどの言語にも、移動を表すための特定の表現形式がある。その表現形式は時として複雑であり、また言語間の違いが大きい。それは移動というものが多面的な現象であり、様々な表現方法がありうるからである。

世界の諸言語における移動表現に関しては、Talmy (1991) が類型を提案しており、それを発端として様々な言語についての研究が行われてきた。Talmy は、移動の経路が文中のどの位置で表現されるかによって言語を分類できるとし、主動詞で経路を表す傾向のある言語を verb-framed language (動詞枠付け言語)、動詞の付随要素で経路を表す言語を satellite-framed language (付随要素枠付け言語) と呼んだ。英語は went out のように経路を動詞の付随要素で表現するゆえに、付随要素枠付け言語であるとされる。日本語は「(そこから) 出た」のように、それを主動詞で表現することが多いとされ、動詞枠付け言語に分類されてきた (松本 1997 など参照)。この区別は、Slobin (2004)、Matsumoto (2011) などで修正されてきている。

また、移動を表す言語表現における、様態、経路などの表現頻度に関しても研究がなされてきた。Slobin (2000) は、様態に言及する頻度が言語によって異なるとして、様態卓立性という概念を提示している。古賀 (近刊) は類似の卓立性の違いがダイクシスに関しても見られると指摘している。

このような先行研究の多くは、主に移動の様態と経路に注目したものであり、経路の中でも話者との位置関係を示すダイクシスの表現に関しては、あまり考察が行われてこなかった。しかし、日本語などの言語の移動表現の性質は、ダイクシスを無視しては十分に記述されない。そこで、日本語の移動表現を諸言語の移動表現の類型の中に位置づけるためには、ダイクシスを様態、経路と同等に取り扱い、移動表現に関する総合的な類型論を打ち立てる必要がある。ここで紹介する研究プロジェクトは、それに取り組んだものである。

## 2. ビデオ実験

このプロジェクトの特徴は、日本ではあまり行われてこなかったビデオ発話実験という手

法を用いたことである。これは、コンピューターでビデオ映像を一定順序で提示し、それを実験協力者（被験者）に言語で表現してもらい、その発話を録音して分析するというものである。諸言語で統一的な場面に対する言語表現を比較できることから、通言語的な研究に適した研究手法である。このような手法は Max Planck Institute など意味の類型論的研究において用いられてきたものであるが、日本国内ではあまり行われてこなかった。今回この手法を用いて、日本語、英語、ドイツ語、フランス語、イタリア語、ハンガリー語、ロシア語、マラティー語、スワヒリ語、クプサピニ語、シダーマ語、モンゴル語、中国語、ネワール語、タイ語、タガログ語、ユピック語、日本手話（JSL）の 18 言語に関して調査を行った。

提示したビデオは多岐にわたるが、中核となるビデオは、様態（歩く、走る、スキップする）、経路（自転車の所へ、階段を上へ、家の中へ）、ダイクシス（話者に向かって、話者から離れて、話者とは中立的な方向へ）の三つのパラメーターにおいて異なる、27 のシーンを撮影したビデオである。これらのシーンの言語的描写から、1-a) 様態、経路、ダイクシスがどのような頻度で表現（言語化）されるか、1-b) 言語化されるかどうかを決める条件は何か、また、2-a) 経路は文中のどの位置で表現されるか、2-b) それは経路の種類によって異なるか、といった研究課題に取り組んだ。

現在、18 言語のデータについて様々な形での統計的な比較検討が行われている。ここでは明らかになったことからの一部を紹介する。

### 3. 様態、経路、ダイクシスの頻度と日本語

研究課題の一つは、諸言語において、様態、経路、ダイクシスの三つがどのような頻度で表現されるのかである。たとえば、人が、1) こちら側（カメラ）に向かって、2) 走って、3) 階段を上る、というシーンを言語的に描写する場合、この三つのすべてに言及すると複雑な文になる。多くの場合、言語は特定の要素に注目して選択的に表現を行う。そのため、この三つの要素の表現頻度は言語によって異なるのである。

これに関して、日本語を他の言語と比較してみよう。分析が進んでいる 14 の言語に関して、以下のような結果が得られている。ビデオクリップ一つあたり、様態、経路、ダイクシスの表現が、平均していくつデータに出現するかを示したのが、図 1 から図 3 である。

これらの図から、日本語が様態、経路、ダイクシスのどの要素を表現することが多い言語かが、通言語的に比較できる。日本語は、様態と経路に関する表現頻度は平均的であり、ダイクシスに関する表現頻度が他の言語よりも高いことが分かる。

これらの頻度には、複数の要因が絡んでいる。頻度は、1) どのような状況に関して、2) 何度言及するか、による。たとえば、ダイクシスが表現される頻度は、1) どのような状況でダイクシスに言及するかという、言及に課せられた条件の違いと、2) ダイクシスを表現するのに文の中のいくつの位置で表現するか、の二つが関わる。

共同研究者の古賀・吉成氏によってまとめられる日本語の結果からは、以下のことが分かっている。どのようなケースで様態、経路、ダイクシスに言及するかを見たのが図 4 から図 6 である。

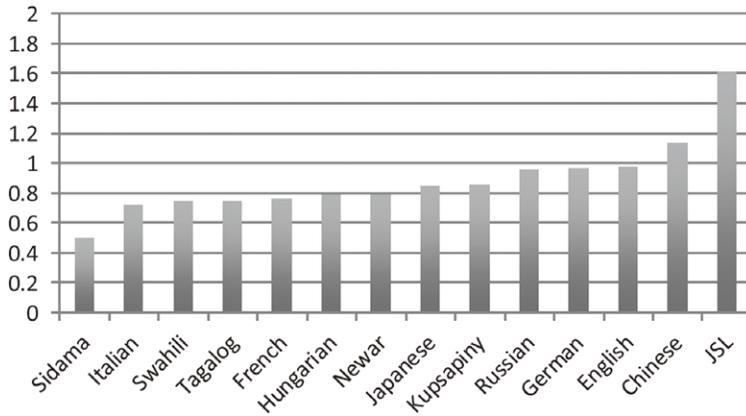


図1 様態の表現頻度 (1クリップあたりの平均)

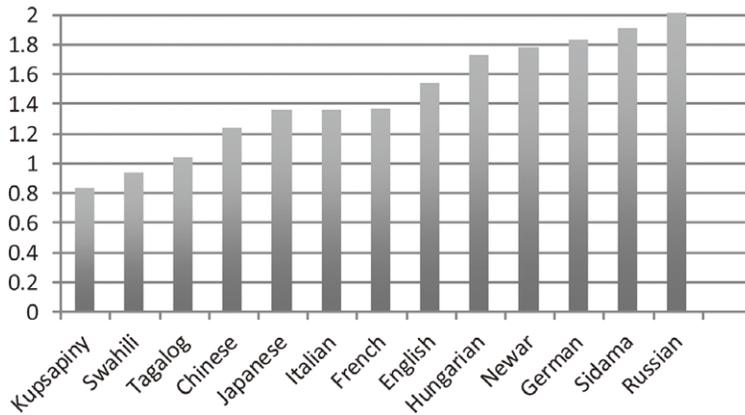


図2 経路の表現頻度 (1クリップあたりの平均)

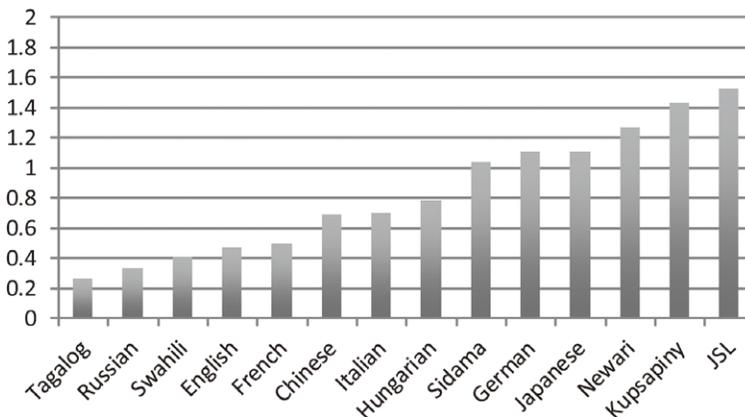


図3 ダイクシスの表現頻度 (1クリップあたりの平均)

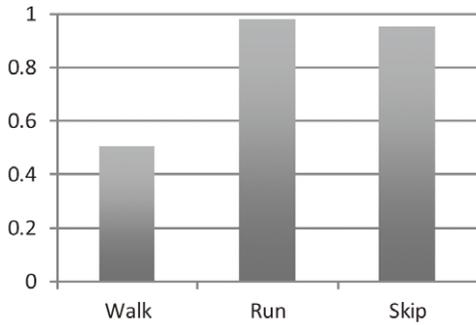


図4 場面別様態言及率

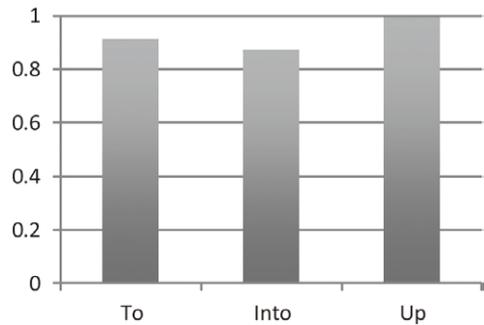


図5 場面別経路言及率（該当経路のみ）

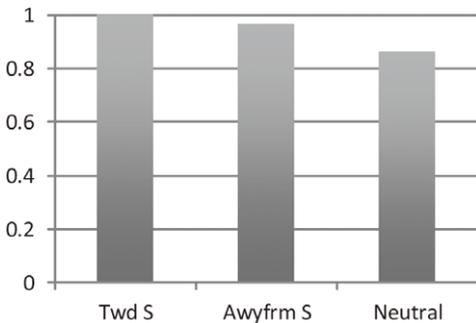


図6 場面別ダイクシス言及率

日本語の場合は、〈歩き〉に対する言及率が低い（WALK 軽視型）。日本語で様態への言及が特に高くないのは、〈走る〉〈スキップする〉といった、人間にとって通常ではない移動様態の場合には言及がなされるが、〈歩く〉については言及されないことが多いからである。日本語よりも様態に関する言及率の高い言語のほとんどは、この〈歩き〉への言及率が高い。この点で、日本語は、たとえば英語などとは大きく異なる。

ダイクシスに関して特徴的なのは、話者に向かう移動のみならず、話者から離れる移動、また、中立的な移動の際にも、「走って行く」のように、ダイクシス表現が使われる点である（ダイクシス一貫言及型）。ダイクシスの表現頻度の低い言語の多くは、話者へ向かう移動の場合にしかダイクシス表現を用いない傾向がある。また、この図には示していないが、日本語の場合、話者に向かう移動の場合は、「こっちに来る」のように、ダイクシスが複数回示されること（多重指定）も、ダイクシス頻度の高さに貢献している。

なお、日本語よりもダイクシスの表現回数が多い言語がある（図3参照）。シナ・チベット語族のネワール語や、ナイル・サハラ語族クプサピニ語では、一文中でダイクシスに何度も言及することが多く、全体的な頻度が高い。日本手話（JSL）の場合は、手話者の前にある空間を用いて移動事象を表現するため、ほとんどの手の動きはダイクシス情報を含んでいる。

#### 4. 終わりに

今回紹介したのは、本プロジェクトで扱った問題のごく一部である。得られたデータは膨大なものであり、現在、様々な側面を分析中である。明らかにされたことは、言語ごと、テーマごとにまとめて発表していく予定である。

##### ●参照文献●

- 古賀裕章（近刊）「日英独露語の自律移動表現」松本曜（編）『移動表現類型論の諸相』東京：くろしお出版。
- 松本曜（1997）「空間移動の言語表現とその拡張」中右実（編）『日英語比較選書6 空間と移動の表現』125-230. 東京：研究社出版。
- Matsumoto, Yo (2011) Typologies of lexicalization patterns and event integration: Clarifications and reformulations. In: Adele Goldberg (ed.) *Cognitive linguistics* (Critical concepts in linguistics), Vol. III, 422-439. London: Routledge.
- Slobin, Dan I. (2000) Verbalized events: A dynamic approach to linguistic relativity and determinism. In: Susanne Niemeier and René Dirven (eds.) *Evidence for linguistic relativity*, 107-138. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Slobin, Dan I. (2004) The many ways to search for a frog. In: Sven Strömquist and Ludo Verhoveen (eds.) *Relating events in narrative*, Vol. 2: *Typological and contextual perspectives*, 219-257. New Jersey/London: Laurence Erlbaum Associates.
- Talmy, Leonard (1991) Path to realization: A typology of event conflation. *Proceedings of the Seventeenth Annual Meeting of the Berkeley Linguistic Society*, 480-519.

《要旨》 通言語的な実験を用いた、移動表現の研究を紹介し、それを通して明らかになった日本語移動表現の性質の一部を報告する。研究内容の全体について解説した後、明らかになった点の中から、様態、経路、ダイクシスの表現頻度について考察する。日本語は、様態と経路の表現頻度が諸言語の中で平均的である一方、ダイクシスの表現頻度が高い。これは、様態、経路、ダイクシスに言及するかどうかに関する条件の違いと多重指定の可能性を反映している。たとえば、日本語は様態について、〈歩く〉に言及しない傾向がある。ダイクシスについては、どのようなケースでも一貫してダイクシス表現（動詞）が使われ、話者へ向かっての移動では多重指定が起こることから、表現頻度が高い。

**Abstract:** Some of the results of a crosslinguistic experimental study of motion expressions are reported, with focus on the status of Japanese in comparison to the other languages investigated. An overview of the project is followed by a discussion of one specific topic: manner, path, and deixis frequencies in linguistic descriptions of motion events. Japanese is close to the average in the frequencies with which manner and path are linguistically mentioned, while the specification of deixis is more frequent than the average. This result reflects (1) constraints on the mentioning of components of motion events, and (2) the possibility of multiple specification of a single component within a clause. For example, Japanese speakers make limited refer-

ences to the manner of WALKING. Reference to deixis among Japanese speakers is frequent, given the consistent reference to deixis across different situation types and the multiple reference to it in the TOWARD THE SPEAKER situation.

## 松本 曜 (まつもと・よう)

神戸大学大学院人文学研究科教授。Ph. D. in Linguistics (Stanford University)。東京基督教大学専任講師、明治学院大学助教授を経て、2004年より現職。

主な著書・論文：Complex predicates in Japanese (CSLI Publications, 1996), 『空間と移動の表現』(共著, 研究社出版, 1997), 『認知意味論』(編著, 大修館書店, 2003), Subjective motion and the English and Japanese verbs (*Cognitive Linguistics* 7, 1996), Typologies of lexicalization patterns and event integration: Clarifications and reformulations (*Cognitive Linguistics* (Critical Concepts), Routledge, 2011).

社会活動：日本語学会評議員, 日本英語学会評議員。

### 領域指定型共同研究プロジェクト

「空間移動表現の類型論と日本語：ダイクシスに焦点を当てた通言語的実験研究」

プロジェクトリーダー 松本 曜 (神戸大学 大学院人文学研究科 教授)

#### プロジェクトの概要

この研究は、ダイクシスの表現に注目することにより、移動表現の類型論の新しい全体像を示し、その中で日本語の移動表現の性質を類型論的に位置づける。そのために、18の言語における、通言語的な実験を行い、諸言語を比較検討する。